諧聲文字論

河野六郎

一、序言

その使用の永きに、又その構造・用法の複雑さに、漢字程面白い文字は少いであらう。その持つ種々なる特色は一般に文字の本質究明に多くの示唆を与へるものである。蓋し言語学の諸領域に於て文字の研究は比較的取り残された観があるが、殊に文字の言語的機能に就いてはあまり眞剣に採り上げられてゐない。然るに漢字を複雑に使用する我々にあつてはローマ字の如き表音文字には見られない特性の故に文字の言語的機能に就いて考察する機会をより多く持つのである。

漢字の研究は中国に於ては古くより行はれ、我が国に於てもその貢献する所少くないが、その所謂文字学は概ね字体の研究であつて、文字の言語的機能に就いては心ずしも明確であるとは言ひ難い。その最も顕著な現れは字と語との混同、若しくは字・語の関係に対する本末顚倒の考へ方である。元来字と語とは別物であり、字は語の視覚的符号であつて、その逆ではあり得ない。然るに中国に於ては従来字が主であり、語を成す音韻はむしろ字の音的符牒であるとする考へ方が支配的である。もつともこれには特殊な事情があつて半ば肯定されるのである。といふのは漢字の特異性によつて或る語を示す字がその語の死滅後もなほ保持せられ、その字を読む必要上新たに字音が造り出されることがあるからである。例へば広韵五支に疵といふ字がある。これは巨支切（g.jie）の音を持ち、「病也詩云俾我疵兮」と註せられてゐる。この詩句は白華の句で、本によつて疵となつてゐるものがある。この異字はかなり古くからあるらしく、釈文に「徐都禮反又祁支反病也」とあるが如く徐即ち徐邈の拠つたテキストに已に疵となつてゐたと考へられる。それは都礼反の音注は諧声声符の性質から言つて疵より疵に就いて加へられたと考へられるからである。然しこの異読及び徐邈の音注は明かに誤である。何故ならこの語は押韵から推して当然疵とすべきである。即ち白華の本文には

有扁斯石　履之卑兮　之子之遠　俾我疵兮

とあり、卑と押韻し、古韻の分類でも一致するが、疵では一致しない（1）。従つて釈文の祁支反の音注並に広韵の傳へるのが正しい。然しこの誤讀の存在は逆にこの語が当時既に死滅してゐたことを示すものであり、徐邈の音注はこの誤字に就いて造り出されたものである。かゝる例にあつてはもはや字が即ち語の代りを務め、音は単にその字の音的符牒即ち字音に過ぎないのである。かやうな語は正しく字語（2）と称すべきである。然しこの字語の存在はやはり特殊な存在であつて、中国語の場合に於ても字と語の本来の関係を何ら変更せしめるものではない。即ち文字の考察を常に語にまで還元せしむべきであるといふ主張は中国の場合でも当然正当化せられなければならない。かく字と語との関係に焦点を置く時、漢字は種々なる問題を提起するかに見える。

漢字は表意文字（ideograph）である、といふのが通説である。この定義はしかし心ずしも正確ではない。寧ろ表語文字（log.gr.ph）

であるといふべきである(3)。思ふに文字といふものは漢字に限らず表語的なものである。アルファベット式表音文字といへども語の表示がその主要な目的であつて、たゞその表語が語形を構成する音韻の表示といふ点に特色があるのである。この事を最も顕著に示すのは現代英語の文字表記である。例へば knight の如き spelling が今日なほ用ゐられるのは単に英国人の保守性にのみ起因するのではない。寧ろその保守性が保たれるのは文字の本来の機能たる表語性に支へられてゐるからである。この spelling は元来は発音的表記であつた（ドイツ語 Knecht 参照）。しかし音韻変化を蒙つてこの spelling が表音的価値を喪失した後に於てもこの spelling 全体が語全体を表示するに有効であるため（例へば同音語 night との識別）、表音性を犠牲にしても保持されてゐるのである。又一方に於いて音声連続を厳密に文字に移すことは不可能である。表音文字と称するものも語の音形の特徴を暗示的に示すに過ぎない。要するに文字は一般に語を表示するものであつて、表意とか表音は表語の仕方に関して言ひ得るのである。

漢字にあつては表語性は表意と表音の二の仕方で果される。所謂指事・象形・会意の文字は表意による表語文字であり、諧声文字は表音による表語文字である。もつとも表意といひ表音といふもそれは専ら各字の起源に就いて言ひ得ることであつて、表意なり表音なりの原理によつて一旦特定の語と結びつくと、その文字は表意若しくは表音の媒介を藉りずに直接その語の sign となる。例へば日にしろ上にしろその起源的形態は正しく象形であり指事であるが、少くともその楷書の形態では已に全く慣習化され、心ずしもその表意の機能を果してゐるとは言へない。日や上はそれぞれ AC. ńiět (4) 「太陽」或は AC. źiang²「上」なる語の sign であるに過ぎない。若しこれらがなほ表意的であると言ひ得るとしても、それは飽くまで ńiět 或は źiang² といふ語を介して「太陽」なり「上」といふ観念に結びついてゐるのである。

かく文字の言語的機能を考察する時漢字は種々興味ある問題をするのであるが、本稿に於ては所謂諧声文字に就いてその著しいを述べてみたい。六書の中にあつて諧声文字の定義は極めて明かつて何ら議論の余地が無いかに見える。それは会意文字と共に二字の結合であり、義符と声符より成つてゐる。例へば江の字は、シ（水）と声符工の結合である。この諧声の原理によつて作られた文字は、漢字全体の約八、九割を占めるといはれる。この事は諧声原理の発見が、漢字の発展に如何に大なる便宜を与へたかを示すものである。この諧声文字が如何なる機能を持つかに就き、卑見を述べて江諸賢の御批判を仰ぎたいと思ふ。

二、義符の機能

諧声文字の特色は義符と声符より成つてゐる所にある。従つて両面の特徴を有つ。先づ義符の附加は意味論的に甚だ興味がある。即ち義符は意味範疇の標識である。その意味範疇の建て方を全体として観る時は諧声文字の基礎が置かれた時期に於ける中国人の観念体系の構造の一面を反映してゐるとも考へられる。この意味範疇は全く意味に就ての範疇であつて、語の形態に現れてゐるのではないが、古代の中国人が森羅万象に対してその観念を幾種かの範疇に類別した結果であつて、この類別は同じく義符を持つエジプトの象形文字、メソポタミアの楔形文字の意味範疇と対比すべきものである。なほアフリカの Bantu 語族に属するスビア語(5)では語の前接辞によつて意味範疇の類別を計る。例へば人間（単数）の範疇に属する語には前接辞 mu- を附ける。mu-ntu「人」mu-sisu「男兒」の如くである。又人間以外の動物の範疇に属する語、例へば in-zoka「蛇」の如く in- が附く。この言語にあつては意味範疇が接辞の形で語形に明示される。これら諸言語の類別する意味範

嘘は古代人の思考構造の片鱗を何程か示すものとして興味ある研究の対象となり得るであらう。尙漢字の義符は常にその本来の意味論的機能を発揮するものではない。例へば虛辭を示す猶の如き純粹の假借の場合はその字の意味範疇は何ら役立つてゐない。

この義符の添加で最も注意すべきは語の意味分化を明瞭にすることである。例へば AC. tsˈie といふ語は互ひに關係のある種々なる意味を持つ。「枝」、「分家」、「手足」等いづれも分岐といふ契機を共有してゐる。この語は恐らく始め支といふ文字を以て示されたが、後その分化した意味に対してそれぞれの義符が添加された。即ち、「枝」に対しては義符木を加へ、「手足」に対しては義符月（肉）が添へられて、支に対し枝・肢の如き文字が作られた。この支・枝・肢は三つの字であるが、語としては AC. tsˈie¹ といふ一語である。即ち語の多義性を字の分化によつて或る程度救つてゐるのである。語では区別されないものを字の差別によつて区別するといふことは文字言語を音声言語から遊離させるに与つて力がある（6）。

三、声符の機能

諧声文字の顕著な特色は声符である。声符である以上何らかの意味で表音といふことに関聯する。然し声符は語の音韻構造を示すものではない。声符をなしてゐる文字が諧声文字の示す語の音節全体を表はすのである。例へば枝や肢の如き諧声文字に於て支は声符の役を果してゐる。この場合支の音 tsˈie¹ によつて枝・肢の音節を表はしてゐるのである。この例では語としては元来同じ語であるから表音は完全である。然し常にさうとは云へない。否、むしろ大部分の諧声文字にあつては声符の表音は不完全であり、近似的である。例へば江の字の如きは現代音の立場からすれば声符の文字工が kung¹ であるに対し、tˈsiang¹ の音を示し、声符の表音的機能は始ど全く喪はれてゐる。もつとも江は中古音 kǎng¹、上古音 kŭng（ŭ等は円唇性の緩い稍々中舌的なu）となつて声符工にかなり接近はするが、表音はやはり近似的である。又江の場合この字の表はす語の蒙つた音韻変化によつて表音性が損はれたことは同時に声符の表音が各々の諧声文字の作成当時にのみ働き、一旦出来上つて了つた後はその諧声文字全体が特定の語を表示するのみで、声符はもはや表音的機能を営まないといふことを示すものである。

又声符の利用は全く特殊的であり、個別的である。今一例を AC. tˈsie¹ といふ音節を取つてみると、諧声声符は支・巵・只・多等様々である。又同じ声符支は単に、AC. tˈsie¹ のみならず、gˈjie¹ kˈiie¹ gˈiie¹ kˈiie² gˈiie² 等を表はす。この事は声符が普遍的な表音的記号になりきつてゐないことを示すものである。即ち表音性といふ点から見れば中途半端な段階に止つてゐる訳であるが、これは表音を利用して形成せられた諧声文字が直接語を代表するに至つて表音性を却て犠牲にした為であり、この点上述の knight の場合と一脈相通ずるものがある。この点に於ても漢字の表語性は明白に認められるであらう。この特色は同じく単音節言語を基礎とし、又同じく表意的文字から出発した Lolo の文字とは対蹠的である。後者に於ては表意文字をその元来示した語の音韻結合を普遍的に表示するに用ゐてゐる（7）。例へば○は元来「月」を意味する語 shlà の表意文字であるが、この字は語の如何を問はず shlà なる音節を示す。即ち、i-shlà「魂」、iee-shlà「卵」等の音節 shlà を示すのにこの文字を用ゐてゐる。Lolo の場合は同音異義語（homophone）が限られてゐるから、上の如き事情も許されるであらうが、中国の場合はいささか異なつた方向を辿つたのである。若し中国がその文字の発展過程に於て Lolo と同様な精神段階にあつたならば、その結果は Lolo と同様音節単位の表音文字を現出せしめたであらう。然し中国では文字の発展と前後して精神的に異常な発達を遂げたため、観念の分化は文字をしてその表音的方向

に向かはしめず、むしろ文字の表語性を極度に発達せしめた。即ち中国人は一定の語を一定の字に定着せしめる原理を巧みに利用して文字をいはゞ語の音韻から遊離させるに至つた。而してこの文字の定着に義符との結合に成る諧声文字の役割は大きい。既に見た如く義符の添加は文字分化を主要な機能とするからである。かく元来表音的に形成せられた諧声文字は一定の語の表示に定着せられるとその表音性を放棄して了ふのである。

かく諧声文字の表音性は一旦その文字が固定するとその機能を停止して了ふのであるが、しかし諧声文字の表音的機能は全く涸渇して了ふのではない。新なる文字の形成に際してその機能は俄然として発揮されるのである。その典型的な例として近世中国語の第一人称を示す俺が挙げられる。呂叔湘氏の見解（8）に従へば俺は我們なる複数形から発すると云はれる。この見解は音韻史的にも支持せられる。即ち a^{-3}mən（我們）が一音節に縮約されると am^{2} となる。丁度你們から你^{5}(nim^{2})が生ずるのと全く軌を一にする。この am^{2} なる形は勿論口頭語の裡に発生したもので、最初は文字に定着されてゐなかつた。これが白話文語に採用されると、文字を必要とする。この要求に応じたのが諧声文字である。その声符として同音の奄が選ばれ、義符としてイ（人）が採用された。即ち声符奄はその表音性を発揮したのである。しかしこの場合にも奄の表音性は特殊的に仂いてゐるのであつて一般に奄字が音節 am^{2} の表音記号として仂いてゐる訳ではない。

この俺に就いて注意すべき事は代名詞としての俺は近世中国語に属するが、この同じ字が古典文語の中にも見出されることである。この場合は AC. ˈʔäm^{2}（広韵、於験切）で、「大」を意味し、代名詞の俺と何ら関係が無い。この両者は正に同字異語である。この種の例は他にも散見する。「日本」を意味した倭といふ文字も異なつた二語を示している。一は AC. ˈʔuˇ（広韵、烏禾切）で「日本」を意味し、他はAC. ˈʔwiˇ（広韵、於為切）で別の意味（9）を示す語である。これら同字異語の存在は諧声文字の原理からすれば全く自然なもの一字多音のものの中にはこの種の同字異語はかなり多いのではないと思ふ。

諧声声符はこの様に造字の際にその表音性を発揮するが、又外音の場合にもその表音的機能が現れることがある。例へば現在日本字音で輸をユと読み、洗をセンと読むが如きがそれである。輸は広韵式朱切（sˈiu）又は式注切（sˈiu^{2}）である。日本字音としてはシュユ、まるべきで輸贏を決するなどといふ場合には正しくシュエイと読まる。所が之を現在ユと読むのは声符俞によつて読んだためである。洗は広韵には先礼切（sei^{2}）で「洗浴」の注がある。然るに現在の日本ではセイとはいはず、センと読むのも声符先が仂いてゐるからである。尚広韵にはこの字に蘇典切（sen^{2}）の音もあるが、この場合には「姑洗律名」とあり、「洗ヲ」意味ではない。同様なことは朝鮮字音にも認められる。例へば歐・鷗は広韵烏侯切（ˈʔəu）で、日本字音でもオウと正しく読まれてゐる。然るに、朝鮮字音ではこれらは ku と読まれる。歐羅巴の如き外国地名をも ku-ra-pa と読むが如き例すらある。これは明かに声符區（朝鮮字音 ku）に依る造音である。これらの字音は明かに誤読であつて、正しい字音が忘れられてゐるのであるが、諧声声符の仂きが正音に克つた結果である。これらの例は声符文字と派生文字との間に音韻的開きがある為、声符の表音性が発揮されたと思はれるけれども、更に考へれば声符文字と派生文字の間に音韻的開きが少い場合にも声符の表音性が仂いてゐて、むしろその表音性によつて傳統的字音が保たれて来たとも言ひ得るであらう。この様な事情は恐らく中国自体にも存したと考へられる。勿論生命を持ち続けてゐる語の場合にはあり得ないが、所謂字語の中で特にあまり用ゐられない字にこの現象が見られる。例へば広韵五支に駙といふ

字が章移切（t'siẹ¹）の条にも又巨支切（g'jie¹）の条にも見える。而して章移切の条には「馬强」の注あり、巨支切の条には「勁皮」の注があつて、同語なることは明かである。恐らく章移切の音は声符支に依る造音であらう。又同じ韻で汝といふ字は同じく章移切及び巨支切の両音あり、章移切では「水都名」とあり、巨支切では「説文曰水都也」とある。この例では巨支切の音が説文の読み方の傳統を傳へるものであらうから、章移切の音は声符支に依る造音であらう。序言に於て言及した徐邈音もこの一種に過ぎない。かく中国本土に於ても又日本・朝鮮に於ても傳統的字音に対し声符による造音の可能性は常に存するのである。この可能性を考慮に入れると、広韵・集韵等の韻書に載せられてゐる多くの字音の中には心ずしもその字の示す本来の語の形を傳へてゐないものがあるのであつて、古語の復原に際しその識別は緊要である。

四、諧声文字形成の過程

以上諧声文字の有つ性格の輪廓を粗描したのであるが、この諧声文字が形成されるのに如何なる径路を経たかに就いて考へてみたい。その本格的議論には多くの実証的研究を要するので後日に譲らねばならない。然し現在の予備的段階から立論が許されるならば、少くとも次の事は言ひ得るのではないかと思ふ。即ち同じ諧声文字といつても二の径路があつたと考へられる(10)。その一は前に述べた枝・肢の如く一語の意味分化に応じて義符を加へる場合である。この場合が恐らく最も多いと考へられる。この場合義符は Creel の所謂 aphonic determinative（非音的規定字）である。然し正確には semantic determinative（意味的規定字）と呼ぶべきであらう。この原型が与へられると假借として用ゐられた文字にも義符が加へられることが可能となる。例へば鎚（AC. tuâi¹）は周礼に追に作つてゐる（周礼追師）。これは追（AC. tiwi¹）の假借に義符金を加へたものである。更に或る語が之を表はすに假借せられた文字を独占した結果、元来その文字が示した語に対して義符を加へて諧声文字を作つた場合もある。例へば求は元来AC. g'jau¹「皮衣」を示す字であつたが、同音の「求メル」を意味する語に假借せられ、遂にこの語が求の字を独占し、「皮衣」に対しては逆に義符衣を加へて裘又は裘の字を造り出した(12)。

上の諸例は声符をなす文字が基礎となつてそれに semantic determinative を加へることによつてそれぞれの字の表語性を明確にした場合である。之に対して少数ではあるが、上と反対に義符が基礎となつて之に phonetic determinative（音韻的規定字）を加へた例が若干存する。これはむしろより古い時代に認められる様である。例へば禾の字は後世は AC. ɣuâ¹（広韵「粟苗」）にのみ専用せられるが、古くは心ずしもさうではなかつた。即ち甲骨文に於て明かにこの字を以て AC. nen¹（年）をも表はした(13)。やがて両者の混乱を避ける為、音符人（AC. niẹn¹）が加へられ、これが年といふ文字に転じたのである。又祇（AC. g'jiẹ¹）は広韵によると示とも書かれた。示の字は普通 AC. d'zi¹「示ス」を示すので、混同を避けるため声符氏（AC. z'ie²<g'jiẹ²）を加へて祇が成立したと思はれる。この種の例は恐らく甲骨文・金石文の精細なる研究によつて尚多く発見出来るであらう。蓋し phonetic determinative の添加による字の分化はエジプト・メソポタミアの古代文字に於てはむしろ普通に見られる所であるからである。

五、結語

斯様に一方には semantic determinative の添加により、又一方には phonetic determinative の附加によつて合成されたのが諧声文字である。その径路は相反するが、結果は同一である。即ち意味範疇を規定する義符と音韻を暗示する声符の結合である。この構造原型が与へられた後は容易に両者の結合によつて任意の文字を造り出すことが

可能とされる。かくて漢字の大半はこの諧声の原理に従つて造り出されるに至つた。而してこの諧声文字を可能ならしめてゐる素因は語を文字に定着せしめんとする傾向であつて、この傾向は漢字全般に認められるものである。衆知の如く漢字の歴史の中に於ては絶えず文字の固定化・標準化が試みられた。石経の設定、字書の編纂いづれも漢字の標準を定めてその示す語を定着せしめんとする努力の著しい現れにあらざるはない。又この努力は語そのもの曖昧さ、例へば同音異義語の併存、多義性などを文字の上で識別することにも現れ、その結果口頭語では存立し得ない夥しい同音異義語が文字上の識別によつて保たれるといふ古典文語の特異性を現出せしめてゐる。

本論は筆者の企図する文字論の一試論である。文字論とは文字の言語的機能を研究する分野に假に名づけた名称であつて、文字の字形を論ずる文字学と区別したものである。もとより文字論は漢字のみを対象とするものではない。然し漢字は文字論的研究には最も興味ある材料を提供するものである。勿論本論の如き試論に於ては文字論の核心に觸れるにはいまだ程遠いものがあるが、これが文字論建設の空しき努力とならなければ幸ひである。（二七・三・二五）

註 (1) カールグレン氏に拠れば氏声は第十九類で -iěg、氏声は第十一類で -iər若しくは -iěr である。又董同龢氏（「上古音韵表稿」、国立中央研究院歴史語研究所集刊第十八本）に拠れば氏声は佳部で -iěg、氏声は脂部で -ied若しくは -iedである。

(2) 「字語」といふのは筆者の假称である。尚註(6)参照。

(3) この説は P. A. Boodberg, Some Proleptical Remarks on the Evolution of Archaic Chinese, HJAS, Vol. 2, Nos.3—4(pp. 329—372), 1937 に見える。この論文は原理論は面白いが、その実証的試論はあまり空想的である。尚、logographic Theory of Chinese Characters, HJAS Vol. 5, No. 2, 1940 (pp. 188—191) を見よ。

(4) AC. は Ancient Chinese の略符、中古音を指す。

(5) F. N. Finck, Die Haupttypen des Sprachbaus (1910) 拠る。

(6) 最近ヨーロッパに於ても音声言語の語（mot phonique, 字言語の語（mot graphique）とを区別して考へる考へ方がある様である。Georges Galichet, Physiologie de la langue française (Collection Que sais-je? 392, 1949) 参照。ノ考へに従へば支・枝・肢は一の mot phonique に応ずる三の mot graphique といふことになる。夙に Henry Bradley (The Making of English) は flower と flour の正字法上の差別に注意してゐる。この両語は同音語であり、語源も同一であると言はれる。

(7) Paul Vial, Dictionnaire français lolo, etc, Hongkong, 1909.

(8) 呂叔湘「説「們」」（呂叔湘教授言語学論文集、帝国書院、p 160）。

(9) 「倭：東海中国烏禾切」（平声戈韻）、「倭 愼也、於為切」（平声支韻）。

(10) P. Pelliot, Brèves remarques sur le phonétisme dans l'écriture chinoise, T'oung Pao, Vol. xxxII (1936), p162—166 参看。

(11) H. G. Creel, On the Nature of Chinese Ideography, T'oung pao Vol. xxxII (1936), p. 85—161

(12) B. Karlgren, Philology and Ancient China, p. 34

(13) 商承祚「殷虚文字類篇」（説文解字活林三二二〇ォ）